

山と博物館

第47巻 第5号 2002年5月25日

市立大町山岳博物館



オオルリシジミ

写真と文 清水 博文

本種はかつて大町市付近では南・北安曇郡の山麓地域に局所的に生息していましたが、近年は人の手により保護監視されている限られた地域などでしか姿を見ることができなくなっています。大町市では一九五〇年ごろまで生息していたと大町市史（一九八四年）に記録されていますが、その後の記録はありません。現在は残念なことですですがクララの自生地がありません。この美しいチョウの姿はありません。

本種は、人の手が入れられた草地や田畠の畦とその周りを中心には生息していましたが、ゴルフ場などの開発や、圃場整備、草地の森林化などにより生息できる環境が変化したりしたため個体数が減少し、稀少種となるとそこに採集などが集まり、さらに圧力が加わった結果、現在は全国的にみても本州（長野県と新潟県との境付近や長野県の東部など）と九州の一部にしか残っています。

このように本種をはじめとする里山とそのまわりにすむチョウのほか、メダカやゲンゴロウ、タガメ、ゲンジボタルなど今まで普通に見えたのできた種がいつの間にか姿を消してしまつたりすることが身近な環境で起きています。

オオルリシジミは、名前とおり翅の表がルリ色をしたシジミチョウで、五月末から六月中旬、このチョウの食草であるクララというマメ科の多年草の花穂が伸びだす頃に羽化します。環境省のレッドデータブック（一九九七年）では絶滅危惧Ⅰ類（絶滅の危機に瀕している種）¹、生息個体数が減少していく何らかの処置をしないと近い将来絶滅の危険性が極めて高い種²に指定されています。

信州の高山性トンボ

枝 重 夫

本州の高山性トンボは14種

鹿野忠雄（一九二九）は“高山性蜻蛉”として、タカネトンボ、カオジロトンボ、*Enallagma cyathigerum*（エゾイトトンボ？）、（オオ）トラフトンボ、カラカネトンボ、ホソミモリトンボ、オオルリボシヤンマ、ムツアカネの八種を提唱した。その後、朝比奈正二郎（一九五四）は“本州産高山蜻蛉類”として、カラカネイトトンボ、ルリイトトンボ、ルリボシヤンマ、カラカネトンボ、オオトラフトンボ、ホソミモリトンボ、エゾトンボ、ムツアカネ、カオジロトンボの九種を選んでいる。さらに枝重夫（一九七七）は、“信州の高山性トンボ”を発表しているが、この中で高山性と“性”を入れ、先の鹿野の表現に戻した。その理由は、これらのトンボが本州だけに限つても低地に生息することがあるため高山という言語に幅をもたせたいことであるが、“性”を挿入して“ざん”と“どん”を分離し、発音上“ひびき”をよくしたいという意図もある。またこの報告の中で、オゼイトトンボ、アマゴイルリトンボ、キバネモリトンボの三種を追加し、先に鹿野が挙げたエゾイトトンボ、オオルリボシヤンマの二種も認めてもいいのではないかとした。キバネモリトンボは典型的な高山性トンボなのに朝比奈の選択から漏れたのは、その時点では本州からは発見されていなかつたからである。

鹿野忠雄（一九二九）は“高山性蜻蛉”として、タカネトンボ、カオジロトンボ、*Enallagma cyathigerum*（エゾイトトンボ？）、（オオ）トラフトンボ、カラカネトンボ、ホソミモリトンボ、オオルリボシヤンマ、ムツアカネの八種を提唱した。その後、朝比奈正二郎（一九五四）は“本州産高山蜻蛉類”として、カラカネイトトンボ、ルリイトトンボ、

九五五）、岩手県（一九六五）、山形県（一九八四）から記録されている。さらに枝（一九九六）は、上高地付近の高山性トンボ八種を概説した際に、エゾイトトンボとオオルリボシヤンマを高山性トンボとして正式に認めた。したがつて以上を合計すると、本州の高山性トンボは一四種になる。

信州の高山性トンボは12種

長野県にはこれら一四種のうち、カラカネイトトンボとキバネモリトンボを除く一二種が分布しているので、それぞれの種名を掲げて解説する。

一、エゾイトトンボ

Agrius lanceolatum Selys

東シベリア、朝鮮半島、サハリンを経て、北海道には広く分布する。和名はそれに由来するが、“性”を挿入して“ざん”と“どん”を分離し、発音上“ひびき”をよくしたいといふ意図もある。またこの報告の中で、オゼイトトンボ、アマゴイルリトンボ、キバネモリトンボの三種を追加し、先に鹿野が挙げたエゾイトトンボ、オオルリボシヤンマの二種も認めていいのではないかとした。キバネモリトンボは典型的な高山性トンボなのに朝比奈の選択から漏れたのは、その時点では本州からは発見されていなかつたからである。

一九三五年に朝比奈博士が尾瀬ヶ原で初め
二、オゼイトトンボ
Agrius leme Asahina

（写真1）

Enallagma deserti circulatum Selys

日本特産亞種で、一九五二年に新潟県守門岳が南限になる。長野県では、八ヶ岳白駒池、群馬、長野、新潟の各県に分布している。エゾイトトンボの方がはるかに少ない。長野県では、戸隠村黒姫山麓、大町市居谷里湿原、茅野市蓼科湖、白馬村落倉湿原、豊科町菖蒲池、白馬村親海湿原、明科町ディラボッチ湿原（発見順）のわずか七カ所が知られているだけである。この中で蓼科湖は分布の南限になる。

四、アマゴイルリトンボ

Platycnemis echigona Asahina

日本特産亞種で、一九五二年に新潟県守門岳が南限の雨乞池で発見された。和名はその池の名、種名は越後に由来する。その後、山形県月山南麓、福島県五色沼から発見され、一九七一年には長野県小谷村蛙池に生息することがわかった、第四番目の分布県になった。一〇



写真1 ルリイトトンボ (オス)



写真2 アマゴイルリトンボの交尾

一九三五年に朝比奈博士が尾瀬ヶ原で初め

岐阜の各県に知られ、岐阜県白鳥町の村間が

日本特産亞種で、原名亞種 *E. d. deserti* Selysはユーラシア大陸に広く分布する。日本亞種は、北海道、秋田を除く東北五県、栃木、群馬、静岡、長野、新潟、石川、福井、

新潟県二、長野県二の合計五カ所に増えたが、長野県角間池が分布の南限である。



写真3 カラカネトンボ (オス)



写真4 ムツアカネ (オス)

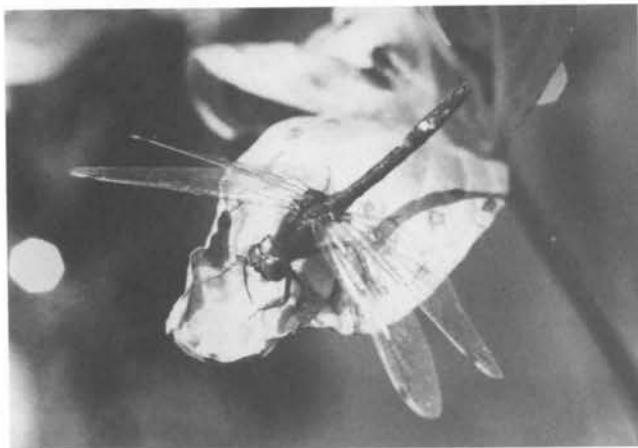


写真5 カオジロトンボ (オス)

五、ルリボシヤンマ
Aeschna juncea (Linné)

広く分布する。日本では、北海道、本州（千葉県を除く）、四国（徳島県だけ）に生息する。北アメリカ、ヨーロッパ、シベリアなどに

地田代池では逆で、オオルリボシヤンマの方
が稀である。

七、オオトトワフネンボ
Epitheca bimaculata sibirica Selys

原名亜種 *E. b. bimaculata* Selys はシベリア
西部からヨーロッパに分布するが、本亜種は

田湖、上田市砂原池、同赤坂大池の合計10
の産地が記録されている。

八、カラカネトンボ
Cordulia aenea amurensis Selys

(写真3)

原名亜種 *C. a. aenea* Selys はシベリア西部
からヨーロッパ各地に分布しているが、本亜

九、エゾトンボ
Somatochlaora viriditincta (Uhler)

本種は北海道と本州の東北地方や中部の山
地に分布する後翅長が40mm以下の小形のも
ので、本州の低地や四国、九州にいる後翅長
が40mm以上の大型種は別亜種のオオエゾト
ンボ *S. viriditincta atronitens* Selys として区別
されてきた。しかし両者間には大きさ以外の
外部形態などに明確な差異が認められないの
で、最近では同一種とみなされている。ところ
が北海道や青森県恐山、群馬県富士見峠で
採った個体はすべて小形で、茨城県や千葉県
の平野部のものは大形であり、長野県各地産
のほとんど個体は小形である。とくに安曇
村内では、上高地田代池、乗鞍高原鈴蘭小屋、
同番所の池、同あざみ池、同日本一平池の個
体はすべてがエゾトンボの範疇に入るもの
である。両亜種が同一種のエゾトンボとい
うことになる。

一〇、ホソミモリトンボ
Somatochlaora arctica (Zetterstedt)

ヨーロッパ北部から中国東北部、シベリア
などに広く分布し、サハリンを経て、北海道
と本州に達する。本州では、福島、栃木、群
馬、長野、新潟、岐阜の六県に記録がある。

長野県では、上高地田代池、八ヶ岳天狗岳、
同双子池、富士見高原、乗鞍高原牛留池、同
あざみ池、同日本一平、上高地大湯沢（発見
順）に生息している。なお長野県富士見高原
が、岐阜県の日和田高原を約8kmおさえて分
布の南限となっている。

表1 高山性トンボの県別分布

種類	県 (安曇村)	長野	新潟	岐阜	富山	石川	福井	山梨	静岡	神奈川	群馬	栃木	茨城	東京	千葉
カラカネイトトンボ			○								●	○	○	○	○
エゾイトトンボ		○○	○○	○	○	○	○				○○	○○	○○	○○	○○
オゼイトトンボ	●	○									○○	○○	○○	○○	○○
ルリイトトンボ	○○	○	●			○	○				○○	○○	○○	○○	○○
アマゴイルリトンボ	●	○													
ルリボシヤンマ	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
オオルリボシヤンマ	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○
オオトラフトンボ	○○	○○	○○								●				
カラカネトンボ	○○	○○	●			○○	○○								
エゾトンボ	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○								
ホソミモリトンボ	●○	○○	○○	○○											
キバネモリトンボ		●													
ムツアカネ	●○	○○	○○	○○											
カオジロトンボ	○○	○○	●	○○	○○	○○	○○								
合 計	14	12 ¹⁰	14	9	6	7	6	4	2	3	12	10	4	2	1

(注) ○印: 分布 ●印: 分布の南限

高山性と亜高山性のトンボ
 本州の高山性トンボ一四種の長野県および周辺の県、さらに関東一都五県における分布をまとめたのが表1である。これら各県の分布状況と長野県内の垂直分布などから、高山性トンボは、カラカネイトトンボ、ルリイトトンボ、オオトラフトンボ、カラカネトンボ、ホソミモリトンボ、キバネモリトンボ、ムツアカネ、カオジロトンボの八種、亜高山性トンボは、エゾイトトンボ、オゼイトトンボ、

長野、新潟、富山、石川、福井、岐阜の各県に分布している。長野県では、上高地田代池、志賀高原、苗場山、白馬岳、八方尾根、小谷村天狗原、同梅池、乗鞍高原牛留池、同あざみ池に記録がある。分布の南限は岐阜県高根村日和田高原ちんまヶ池である。

原名亜種 *L. d. dubia* Selys はシベリア西部からヨーロッパに分布する。本亜種はシベリア東部、中国東北部、朝鮮半島北部、サハリンを経て、北海道と本州の山地に生息する。

本州では宮城を除く東北五県、栃木、群馬、長野、新潟、富山、石川、福井、岐阜の各県に分布している。長野県では、上高地田代池、志賀高原、苗場山、白馬岳、八方尾根、小谷村天狗原、同梅池、乗鞍高原牛留池、同あざみ池に記録がある。分布の南限は岐阜県高根村日和田高原ちんまヶ池である。

高山性トンボは新潟県が一四種で、すべてを産て広く分布し、カムチャツカ、サハリンを経て北海道に達して本州では青森、秋田、岩手、福島、群馬、長野、岐阜、新潟の八県の亜高山に生息する。長野県では、上高地田代池、乗鞍高原番所、八ヶ岳雨池、乗鞍高原牛留池、奈川村白樺峠の池、乗鞍高原キャンプ地入口の池、同あざみ池（発見順）の七カ所で記録されている。その中で八ヶ岳雨池は分布の南限になる。

一二、カオジロトンボ

Leucorrhinia dubia orientalis Selys
(写真5)

本文は大町山岳博物館編『新・北アルプス博物誌』(信濃毎日新聞社、2001)の編集時、新たに書き下ろしたいただいたものです。(編集部)

付属園だより

四月二十九日と五月十四日に相次いで、飼育している二ホンカモシカに赤ちゃんが生まれました。これら二頭の赤ちゃんは、母親の母乳の出が悪い可能性があることから、昨年生まれたカモシカ同様、人工哺乳で育てるようになりました。

また、五月十三日、飼育しているシベリアオオヤマネコの赤ちゃんが双子で生まれました。こちらも現在、人工哺乳で飼育中です。

定印
大糸
年額
郵便
印
刷
発行
行
市立
TEL
FAX
二〇〇一年五月二十五日発行
長野県大町市大字大町八〇五六一
大町山岳博物館
二六一-二三一〇二一
一、五〇〇円(送料込)(切手不可)
座番号〇〇四〇一七一三五三

アマゴイルリトンボ、ルリボシヤンマ、オオルリボシヤンマ、エゾトンボ(小形種)の六種に細分類することができる。また広義の高山性トンボは新潟県が一四種で、すべてを産し、長野県と群馬県が一二種で一番目に多い。お上高地付近に限ると、括弧内に示したよう一〇種を産し、ここは高山蝶ばかりでなく、高山性トンボの宝庫でもあることがわかる。(日本蜻蛉学会会長・松本歯科大学名誉教授・環境省希少野生動植物種保存推進員)